

経営者の道徳的思考と判断に関する理論研究への プラグマティズムからの照射

A Pragmatic Approach to a Theoretical Study on the Executive Moral Thinking
and Judgment

岩田 浩
(Hiroshi IWATA)

平成18年度は、標記テーマに関する研究成果として「教養主義と経営哲学」と題する論文を執筆した。本稿は、村田晴夫先生（青森公立大学教授）の古希記念論文集の一編として寄稿したものであり、近々「文眞堂」より出版される予定である。

以下、本稿の要旨を紹介しておこう。企業経営の発展によって彩られた20世紀の産業文明は、未曾有の経済的・物質的繁栄をもたらした反面、種々の文明論的諸問題をも噴出させてきた。産業化の負の遺産としての環境問題の深刻化、労働環境に見られる人間疎外の問題、経済のグローバル化の進展に伴う文化的な対立の問題といった現代に固有の深刻な問題は、社会に大きな影を落とすことになり、今や産業文明の根源的な見直しが叫ばれている。それは、言い換えれば、前世紀を牽引してきた企業経営の在り方の転換をも迫るものであると言えよう。したがって、この産業文明の影の部分では是正し、来るべき新たな文明社会を構築するには、企業の拠って立つ旧来の経営哲学を抜本的に見直し、文明論的諸問題の解決に資するような新たな経営哲学の組み換えが是非とも求められることになる。本稿は、こうした問題意識に立って、文明論的視点から経営者の実践哲学に焦点を当てることにした。

その際、まず20世紀の産業文明に代わる新たな文明社会を「教養主義社会」として描くことにした。この教養主義社会では、われわれ各人が人類の共通した関心事項である文明論的諸問題に対して責任ある判断を下すことが何よりも求められる。それゆえ、現代の基調的組織たる企業の舵を取る経営者には「正しい判断をいかにするか」という問題が1つの実践的課題として厳しく要請されることになろう。本稿の後半では、これに関する若干の考察を加えることで、今日の開かれた社会における経営者の実践哲学の一端を探ることにした。

以上が平成18年度の研究経過の中間報告である。今年度は、この研究成果を踏まえ、経営者の道徳的判断に関する哲学的な考察を、プラグマティズムの哲学者、ジョン・デューイの所論をベースに展開する予定である。